

彼女が親友を受け入れた夜

待宵草

※本作は『彼女が、親友に褒められた夜』の続編です。

前作を先にお読みいただくと、より楽しめます。

登場人物

陽斗(28)

美咲の恋人。

遼とは大学時代からの親友。

美咲(27)

陽斗の恋人。

真面目だが流されやすい一面もある。

遼(28)

陽斗の親友。

無口であり感情を表に出さない。

紗奈(26)

遼の恋人。

明るく奔放で場をかき回す。

あの夜から、三週間が経った。

俺と美咲は、普通に付き合っていた。

普通に連絡して、普通に会って、普通に笑って。

普通にキスもした。

何も変わっていないように見えた。

ただ、たまに変な間ができた。

美咲が俺の部屋で髪を耳にかける。

俺が少し黙る。

美咲がそれに気づく。

「なに？」

「いや」

「今、変なこと考えたでしょ」

「考えてない」

「嘘」

美咲はクッションを軽く投げてくる。

いつもの感じだった。

でも、少しだけ違う。

俺も美咲も、分かっていた。

あの夜のことを思い出している。

白いブラウス、タイトスカート。

遼の部屋、紗奈の声。

遼に見られて、少し赤くなった美咲。
俺はそれを見ていた。

止めなかった。

いや、見てしまっていた。

「陽斗」

「ん？」

「……まだ覚えてる？」

美咲がテレビを見たまま聞いた。

「何を」

「それ聞く？」

美咲はこっちを見た。
少し笑っている。

怒ってはいない。

でも照れている。

「覚えてるよ」

「だよね」

「美咲は？」

「……覚えてる」

そこで会話は止まった。

重い沈黙ではなかった。

ただ、二人とも続け方が分からなかった。

美咲がクッションを抱え直す。

「なんかさ」

「うん」

「あんなことあったのに、普通にしてるの変じゃない？」

「変？」

「コンビニスイーツ食べてるの、変」

俺は笑ってしまった。

テーブルには、美咲が買ってきたプリンが二つ置いてあった。

「それは食べるだろ」

「食べるけど」

美咲も笑った。

「でも、たまに思い出す」

「うん」

「遼くん、あんまり喋らないのにさ」

その名前が出た。

遼。

俺の親友。

美咲は少しだけ声を小さくした。

「短い言葉の方が、残る時あるよね」

美咲は、ふふっと笑った。

「正直、思い出してるだろ」

美咲は少し赤くなった。

「それは……まあ」

「まあ？」

「まあ、です」

そう言って、美咲はプリンを開けた。

逃げた。

でも、その逃げ方が美咲らしかった。

俺はそれ以上聞かなかった。

でも、聞きたい気持ちは残った。

美咲があの日のことをどう思っているのか。

遼のことを、どれくらい覚えているのか。

そして俺は、それを知りたがっていた。

最初に連絡をしてきたのは、紗奈だった。

土曜の昼。

グループLINEに通知が出た。

紗奈：

ねえ、そろそろ飲まない？

見た瞬間、変な声が出そうになった。

すぐ既読が一つ増えた。

たぶん遼。

次に美咲。

俺はスマホを持ったまま固まる。

紗奈：

普通にさ

前みたいに変な感じじゃなくて

いや、前みたいに変な感じにしたのは誰だよ。

そう思ったけど、送らなかった。

すると、美咲から個別にLINEが来た。

美咲：

見た？

俺：

見た

美咲：

どうする？

俺：

美咲が嫌ならやめよう

少し間が空いた。

美咲：

またそれ

俺は思わず苦笑いした。

美咲：

陽斗はどうなの？

俺：

分からん

美咲：

私も分からん

俺：

真似すんな

美咲：

真似じゃないです

軽い。

でも、その軽さの奥に同じものがあつた。

行かない方がいい。

でも、気になる。

会いにくい。

でも、会わないままだともっと気になる。

俺：

普通に飲めると思う？

美咲：

普通って何？

俺：

たしかに

美咲：

でも、断ったら断ったですっと気まずい気がする

それは分かった。

俺も同じだった。

グループLINEに遼の返信が入った。

遼：

うちでいいなら

いつも通り短い。

それだけなのに、決まった感じがした。

紗奈：

じゃあ決まり 来週土曜ね

美咲：

行く？

美咲から個別LINEが来た。

俺：

行くか

美咲：

うん

俺：

無理だったら帰ろう

美咲：

それは助かる

少し間が空いた。

美咲：

でもたぶん帰らない気がする

その一文を見て、しばらく画面を見ていた。

美咲も分かっている。

何かが起きるかもしれないこと。

それでも来る。

俺も行く。

それだけで、前回とは違っていた。

土曜の夕方。

美咲とは駅で待ち合わせた。

白いブラウスに、細身のタイトスカート。

見た瞬間、思い出した。

あの日の美咲。

遼の部屋で、遼に見られていた美咲。

「おつかれ」

「おつかれ」

美咲は俺の視線にすぐ気づいた。

「なに？」

「いや」

「服？」

「うん」

「前回っぽい？」

自分から言った。

俺は少し驚いた。

美咲は恥ずかしそうに笑う。

「やっぱり？」

「ちょっと」

「違うのにすればよかったかな」

「似合ってるよ」

「それはありがとう」

美咲は素直に笑った。

少しだけ、前より余裕があるように見えた。

いや、余裕があるふりかもしれない。

「遼くんも、そう言うかな」

ふいに美咲が言った。

俺は横を見る。

美咲はすぐに慌てた。

「今のなし」

「なしにするの早いな」

「だって変なこと言った」

「まあ、変だった」

「言わなくていい」

美咲が軽く俺の腕を叩く。

いつもの感じだった。

でも、その一言が残った。

遼くんも、そう言うかな。

俺はモヤついた。

そして同時に、少しだけ期待してしまった。
最悪だ。

でも、もう認めるしかない。

俺はそういうものを、見たいと思っている。

遼のマンションに着く。

何度も来た場所だった。

学生の頃から、遼の部屋には何度も来ている。

四人で飲むようになってからも、何度も来た。

見慣れたエントランス。

見慣れた廊下。

見慣れたドア。

なのに今日は、少しだけ別の場所に見えた。

インターホンを押す。

「はい」

紗奈の声。

ドアが開く。

紗奈が笑っていた。

髪をゆるくまとめ、ラフな服。

いつも通り明るい。

「来た来た」

「お邪魔します」

美咲が言う。

「美咲ちゃん、今日もかわいい」

いきなりだった。

美咲が少し赤くなる。

「ありがとう」

紗奈はすぐに俺を見る。

「陽斗くん、ちゃんと褒めた？」

「褒めた」

「早い」

「駅で」

「じゃあ遼にも褒めてもらわないとね」

美咲が目を丸くする。

「ちょっと」

紗奈は笑う。

「冗談冗談」

冗談に聞こえなかった。

奥から遼が出てきた。

「来たか」

「久しぶり」

美咲が言う。

遼は短く頷く。

それから、美咲を見た。

白いブラウス。

タイトスカート。

その視線は一瞬だった。

でも俺には分かった。

ちゃんと見た。

「……似合ってる」

遼が言った。

美咲が固まった。

紗奈が吹き出す。

「早っ」

俺も思わず笑いそうになった。

玄関でそれを言うのか。

美咲は赤くなって、視線を落とした。

「……ありがとう」

その声が小さくて、またモヤついた。

でも空気は重くなかった。

むしろ、少しだけ笑えた。

紗奈が手を叩く。

「はい、もう今日のノルマ一個達成。入って入って」

美咲が俺の横を通る時、小さく言った。

「早すぎ」

俺は小声で返す。

「効きすぎ」

「うるさい」

美咲がまた俺の腕を軽く叩いた。

その顔は、完全に照れていた。

——

部屋の中は、前とほとんど同じだった。

低いテーブル。

ソファにクッション。

缶ビールと買ってきた惣菜。

流しっぱなしのテレビ。

何度も来た部屋。

でも、前回から少しだけ意味が変わっていた。

いつも通り俺と美咲が並んで座った。

向かいに遼、その隣に紗奈。

前回と似ているようで、少し違う。

「乾杯しよ」

缶がぶつかる。

「普通の飲み会に戻れるか記念」

「それ言ったら普通じゃないだろ」

俺が言うと、紗奈が笑った。

「じゃあ、普通っぽい飲み会記念」

「ぽい、なんだ」

美咲も笑った。

遼は缶を軽く上げただけだった。

最初は本当に普通だった。

仕事の話、コンビニの新商品。

紗奈の職場の変な客。

俺の会社の上司のどうでもいい武勇伝。

美咲が笑う。

紗奈が突っ込む。

遼がたまに短く言う。

普通だった。

でも、ところどころで前回は顔を出す。

美咲が缶を持つ。

遼がそれを見る。

紗奈がそれを見る。

俺もそれを見る。

そして誰かが、わざと違う話をする。

「そういえばさ」

紗奈が唐突に言った。

「今日の美咲ちゃん、前回っぽくない？」

美咲がむせそうになった。

「急に言わないで」

「いや、思ったから」

紗奈は悪びれない。

「白ブラウスにスカート。ね、陽斗くん」

「俺に振るな」

「思ってたでしょ？」

「思ってたけど」

「ほら」

美咲が笑う、紗奈も笑う。

空気は軽かった。

でも遼だけは、静かに美咲を見ていた。

美咲がそれに気づく。

気づいて、少しだけ顔を赤くする。

「遼は？」

紗奈が言った。

「何が」

「今日の美咲ちゃん。前回っぽい？」

遼は少しだけ間を置いた。

「似てる」

美咲がさらに赤くなった。

「……そういう言い方」

「違ったか」

「違うないけど」

美咲は缶を見た。

ちょっと拗ねたような。

照れているような。

困っているような。

その顔が妙に良かった。

嫌なのに、良かった。

紗奈が俺を見て、にやっと笑う。

「陽斗くん、今の顔」

「何」

「複雑そう」

「うるさい」

「当たり？」

俺はビールを飲んだ。

答えなかった。

答えないことが、答えになった。

——

しばらくして、紗奈がスマホを置いた。

「ねえ、ゲームしょ」

「出た」

「何その反応」

「前科がある」

「人聞き悪いなあ」

美咲も笑った。

「普通のゲーム？」

「普通。質問ゲーム」

「それ普通じゃない」

「答えたくないやつは飲めばいいから普通」

「普通の基準が低い」

紗奈は気にしない。

遼は何も言わない。

でも、やめろとも言わなかった。

「じゃあ一問目」

紗奈が缶を置く。